

文学部国際文化学科 中学校一種・高等学校一種（外国語（英語））

【教員養成の理念】

本学は学則で、「教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、仏教の精神に則り、人格を育成するとともに、仏教並びに人文に関する学術を教授研究し、広く世界文化に貢献する」（大谷大学学則第1条）ことが大学の目的であると明記しております。

この仏教精神に基づく教育・学術研究という理念は、本学の教員養成の理念でもあります。それゆえ、文学部国際文化学科に中学校教諭一種免許状（英語）／高等学校教諭一種免許状（英語）の教職課程を設け、自己と他者の理解に努め、国内外の社会で生きていく国際的視野と教養を身につけた人物を育成することは、本学の教育理念および教員養成理念を実現し、教職の専門性を高めるためにも不可欠だと考えています。

21世紀の現在、日本における教育は、外国語の教育充実が大きな課題の一つであります。とくに、異なる文化や言語背景を持った国や地域、人々との交流や交渉が今後急増し、日本社会の「内なる国際化」も進んでいくことは不可避と考えられます。そうした状況において、英語は重要なコミュニケーションの道具であり、英語能力の涵養は異文化理解や異文化共生、ひいては他者理解、相互理解に不可欠なものとなります。

こうした点において、人間解放をめざす仏教精神に基づき、宗教的人格の陶冶を教育理念とし、教育についての人文学術研究にも努めて取り組んできた本学内に設置された本学科が、幅広い国際的視点と教養を背景に、中学校教諭一種免許状（英語）／高等学校教諭一種免許状（英語）の課程を設置して教員養成を行う意義があると考えています。

【理念を実現するための教員養成の構想】

本学では、第三代学長佐々木月樵が示した本学の目標のうち、「三モットー」（本務遂行、相互敬愛、人格純真）に関して、学部においては全学共通科目として建学の精神を伝える「人間学Ⅰ」「人間学Ⅱ」を設け、全学生に対して「宗教的人格の陶冶」を行っております。とりわけ、「人間学Ⅰ」では、日本語と英語の併記テキストを使用し、日本語と英語の比較文化的視点からも建学の理念が学べるように配慮しています。

こうした全学的カリキュラムに加えて、国際文化学科では、「英語基礎演習」「英語コミュニケーション演習」などの言語としての英語に直接関連する科目や、英語学・英文学に関連する「英語学概論」「英文学概論」などの科目、言語と結びついた文化や社会への理解を促す英語圏の社会や文化を扱った「英米の文化」「表現文化演習」などの科目を提供しています。

現在の教育現場では、国際化する社会に応じた、そして言語をはじめ多様な文化背景を持った生徒の教育が求められる機会が増えています。そのため教員には、さまざまな文化的状況に配慮を行い、生徒のコミュニケーション力や広い視野に立った将来的展望

を育む力が求められています。本学科は、こうした生徒を育成できる教員の育成を通して、社会的な役割を果たすことをめざしています。

【学科として養成したい教員像】

本学が建学の理念として掲げる初代学長清沢満之の「開校の辞」では、「我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々において最大事件なる自己の信念の確立の上に、その信仰を他に伝える、すなわち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが、本学の特質であります」と述べられています。この言葉は、人間は生きるために他者を必要とすることを深く理解し、他者と共にどのように生きるべきかという問題に真摯に向き合っ、その成果を他者と分かち合おうとする人物を養成し社会に送り出すという本学の使命を述べたものです。

そして、他者なしに自己は生きられないように、国際化が進む今日の世界において、他国なしに自国だけでやっていくことは事実上不可能である以上、私たちは外国語を通じて、自分とは異なる言語や文化に対する理解を深める必要があります。世界の様々な文化を学ぶために必要なのは、異なることと共通することを「発見する力」、そしてそこから何かを「学びとる力」です。そこで、国際文化学科では、多彩な異文化のありようを学生たちに提示し、それらを基に「発見する力」を伸ばすと同時に、日本の文化や現代社会を問い直す機会を与えています。

以上を踏まえ、国際文化学科において養成したい教員像とは、異文化と自文化の比較を通じて異文化の視点から自文化を問い直す経験を元に、異文化との出会いは刺激的な「発見」と「学び」に満ちていることを生徒に伝え、異文化への興味や関心を引き出すことのできる教員です。また、異文化を学ぶことは自文化を学ぶことであるという国際文化学科での学びを踏まえて、英語を始め外国語を学ぶことは自国語を学ぶことにつながるという観点に立ち、語彙や文法の暗記、表現の反復練習にとどまらない、言語についての意識的で反省的な思考の訓練を伴う授業ができる教員です。そのような教員であってこそ、コミュニケーションを単なる技術ではなく、発見や出会いの契機として学習者に提示し、外国語および異文化に対する積極的な態度を養うことができると考えます。